



大府の隠れた魅力に光を。
郷土の歴史と文化を
多くの人に広めたい

廣江安彦さん(若草町)

「大府の魅力を本として形に残し、後世に伝えていきたい」。そう話すのは、昨年11月に郷土誌『バイオリン王 鈴木政吉が住んだ大府の地』を発行した、郷土史家の廣江安彦さん。土地や時代などさまざまな観点から、「日本のバイオリン王」と呼ばれた鈴木政吉と大府の関係についてひもといたこの本は、令和2年に鈴木バイオリン製造(株)の本社が大府へ移転されたことがきっかけとなり執筆されました。

鈴木政吉と大府との関係を語る上で欠かせない、鈴木バイオリン製造(株)の大府分工場存在について廣江さんが初めて知ったのは、商工会議所に勤めていたときのこと。「情報の一つとして頭の中にはあっても、それほど関心がありませんでした」と当時を振り返ります。退職を機に、改めて大府というまちについて知りたいという思いから、郷土史を勉強し始めました。平成19年から郷土誌を発行し、20作目を迎えた今作については「一冊の本にまとめるに当たって、出来事を整理していくと、大府への本社移転も鈴木政吉像の帰還も、運命的なものを感じました」と話します。

平成26年までは個人の趣味として一人で活動していた廣江さんですが、大府学研究会を立ち上げ、今では支えてくれる仲間がいます。そして、大府学研究会の活動の一環として、執筆活動で蓄えた知

識や経験を生かし、「おおぶ ふるさと検定」も行っています。設問は全て廣江さんが作成し、その数はおよそ30問あるといえます。「ご当地ブームに乗って始めました。子どもたちにももちろんのこと、私と同じくこれまで地元文化を勉強する時間がなかった方々など多くの人に、楽しく大府を知ってもらおう機会にしてみたい」と期待を寄せます。

『日本のいちばん長い日』で有名な半藤一利さんは自らを「歴史探偵」と呼んでいましたが、私もそんなふうにいるいろいろな面から知ることを大切にして郷土史を掘り下げていきたいです」と語る廣江さん。「城があるとか、分かりやすい歴史が大府にはないので、一見すると何もない、大したことがないように思われてしまいましたが、鈴木バイオリンをはじめ、隠れた魅力がたくさんあります。点として存在する歴史や文化を見つけ出し、線としてつないでいくことはとても面白いです」と目を輝かせます。現在も3作品を執筆中で、大府の歴史と文化に対する探究心は依然としてとどまるところを知りません。大府の歴史を紡ぎ、広めていく廣江さんの活動は今後も続いています。

市制50周年を記念して
決定した市の花は？
A.ツツジ B.アジサイ
C.キク D.ウノハナ

▲「おおぶ ふるさと検定」設問一例

cover

共和西小学校で開催された福祉実践教室にお邪魔しました。子どもたちは、ろう者である講師から日常生活での困り事などを学んだ後、実際に簡単な手話を体験。最後は、講師に感謝の気持ちを込めて、両手をひらひらと振る手話で「拍手」を贈りました。

